

11 当院における長期入院透析患者の現状と課題

医療法人 鈴木泌尿器科 徳竹英子、八木恵、松沢みち子
小林章子、市川要子、鈴木都美雄

【はじめに】

年々透析患者の高齢化がすすんできている。当院でも例にもれず独居の患者や要介護の患者が多くなってきている。さらに透析による合併症の他、高齢者の身体的機能の低下や痴呆による生活障害、介護力の不足等により入院を余儀なくされる患者が年々増加し、外来透析 58 名中およそ 1/3 はいつ入院になるか分からない状況である。

今回、当院の透析患者の現状と患者の聞き取り調査を行なった結果を若干の考察をつけて報告する。

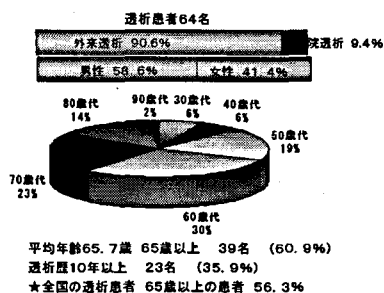
【 当院透析患者の現状 】

透析患者 64 名

- ・ 外来透析患者 58 名 (90.6%)
- ・ 入院透析患者 6 名 (9.4%)
- ・ 平均年齢 65.7 歳

65 歳以上の高齢透析患者 39 名 (60.9%)
(全国 : 56.3%)

2. 当院透析患者の現状



【事例紹介】

〈事例 1〉

K. F 氏 74 歳 男性
家族歴 息子 1 人 娘 1 人 とともに独身
H. 9 2/2
当院にて透析導入し、外来透析を行っていた。

H. 13 10/28

脳出血 (左被殻出血) にて総合病院に運ばれ開頭手術施行

H. 14 3/7

ADL 全介助で気管切開、経管栄養にて管理された状態ではあるが、全身状態落ち着いている為、総合病院は退院となる。

自宅では看る事ができない為、当院にて入院透析となる。

現在表情がでてきたり、問いに反応するなど状態改善されたところもあるが ADL 全介助、気管切開、経管栄養はそのままであり入院透析を続けている。

〈事例 2〉

T. Y 氏 81 歳 女性

家族歴 息子 1 人 娘 2 人

現在長女が一人暮らしのため主に面倒を看ている

H. 9 4/10

総合病院にて透析導入し、外来透析行っていた。

H. 13 10/24

肺炎等にて全身状態悪化し総合病院入院となる。ヘルペス等も併発し、入院長引いている間に痴呆症状出現。

H. 15 1/27

両膝痛や腰痛もあったが全身状態落ち着いた為退院の方向となる。

ADL 一部分介助必要で痴呆、不穏症状もあったため家族より入院透析の希望強く、当院転院し入院透析となる。

現在不穏もなくなり、痴呆症状も改善され ADL も自立しており外来透析可能な状態である。しかし、有力な介護者である長女も仕事の関係で家を留守にする時間が長い為退院にはまだ不安があり現在も入院透析中である。

徳竹英子 医療法人 鈴木泌尿器科

〒380-0906 長野市七瀬中町 34-1 026-227-8515

【 外 来 透 析 の 現 状 】

当院の透析患者の60.9%が65歳以上であり、身体機能の低下している高齢者は些細なことでいつ入院透析が必要になるか分からない状況である。そこで現在外来透析をしている58名を対象に通院状況、今後透析をどのように続けていきたいと思っているか聞き取り調査を行なってみた。

＜ 対象及び方法 ＞

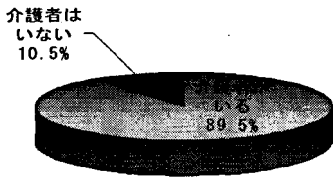
当院透析患58名

- ①介護者が必要になった時の介護者の有無
 - ②介護者は誰か
 - ③現在の通院方法
 - ④通院が困難になった時はどうしたいか
 - ⑤今後どのくらい自分で通院できると考えているか
 - ⑥現在どのように生計をたてているか
- 以上6項目について聞き取りアンケート調査を行った。

【 結 果 】

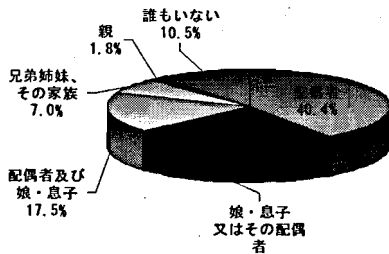
- ① 介護者がいない患者は6名、10.5%であった。

結果①介護者の有無



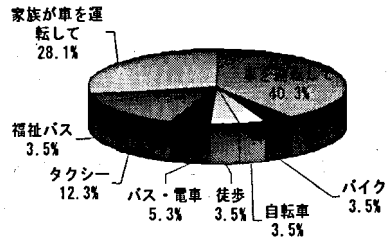
- ② 介護者は配偶者と答えた患者が最も多く23名40.4%であったがそのうち14名は配偶者も高齢であった。

結果②介護者は誰か



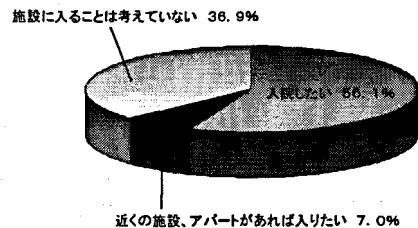
- ③ 通院方法は様々であるが、中でも自分で車を運転して通院している患者が23名40.4%と多かった。運転できる患者にとっては一番楽な通院方法であるため運転ができなくなったらどうしよう、という不安の声が多く聞かれた。

結果③現在の通院方法



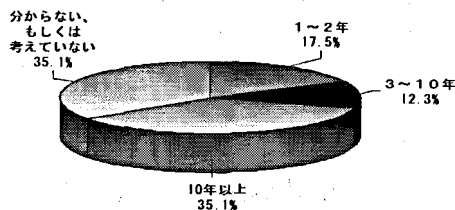
- ④ 通院が困難になったときはどうしたいか、という問いには入院したいと答えた患者が32名、56.1%もいた。また近くの施設やアパート等があれば入りたいという声も聞かれた。施設に入ることは考えていないという患者の中には先のことは考えたくないという患者も含まれている。

結果④通院が困難になった時はどうしたいか



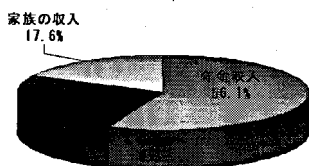
- ⑤ 今後どのくらい自分で通院できると思うかという問いには1～2年という消極的な回答をした患者も17.5%いた。

結果⑤今後どのくらい自分で通院できると思うか



- ⑥ 現在の主な収入源は殆どの患者が年金をもらっているが他の収入源がなく年金収入だけという患者が56.1%であった。

結果⑥現在どのように生計を立てているか(主な収入)



【 考 察 】

(1) 現在当院の64名の透析患者のうち、65歳以上の高齢透析患者は60.9%で全国の65歳以上の透析患者56.3%に比べ当院の高齢化は更に進んでいる。今後、当院の入院透析患者は増加するものと思われる。

(2) 聞き取り調査の結果、介護者がいない患者は不安が強く今後のことについても真剣に考えている患者が多い。反対に介護者が複数いたり、確実に介護をしてもらえる患者は不安も少なく通院が困難になった時はどうするかということも考えていない患者が多かった。

(3) 今後どのくらい現状が維持できるかという問いには1~2年と消極的な答えを出した患者も10人(17.5%)いた。分からない、もしくは考えていない患者が35.1%であった。

(4) 自力で通院できなくなっても施設に入ることには考えていない患者が36.9%いたが、反面入院を考えている患者は半数以上の56.1%もいた。

(5) 大半の患者が年金をもらっている。本人や家族が仕事をしており、それが主たる収入という患者もいるが、高齢透析患者が多いためか、年金収入のみという患者が32名(56.1%)で金銭的に余裕のある患者は多くはない。

【 結 語 】

今回、当院の現状の分析と、透析患者の社会的環境を聞き取りアンケート調査により検討を行った。

当院の透析患者は高齢化が著しく、介護者も高齢であるため介護に不安のある患者、中には介護者がいない一人暮らしの患者もおり、また将来通院に不安を持つ患者も認められた。

1998年の全国統計でもこのような患者は増加傾向にあり、今後益々入院もしくは入所透析の必要が増大すると思われる。

また長期透析患者の増加と共に、合併症による総合病院への入院も増えてきているのが現状である。現在の制度上、総合病院では長期入院透析が困難であり、合併症治療のための透析患者の受け入れが難しくなっている。そのため、社会的要因による長期入院透析は地域社会での役割分担として、サテライト的な透析施設において吸収できるような体制を整える必要があると思われる。

さらに、福祉施設からも通院透析できるように法整備やヘルパー等のサポートにより自宅介護をやりやすくしてゆく必要があると思われる。

【 参 考 文 献 】

- 1) 日本透析医学会統計調査委員会：わが国の慢性透析療法の現況(1998年12月31日現在)透析会誌33.2000
- 2) 日本透析医学会統計調査委員会：わが国の慢性透析療法の現況(2001年12月31日現在)透析会誌36.2003
- 3) 千葉志津子：要介護透析患者(とくに痴呆高齢透析患者)のケアナーズの立場から—透析ケア2001. V o 1. 7
- 4) 高田ますみ：痴呆患者を支える外来型透析専門施設の役割 透析ケア2000. V o 1. 6